

白菊

秋元 倫

その手紙は、冬晴れの午後が届いた。白い和紙の便箋に人柄を現わすような柔らかく読み易い字で綴られていた。

突然の手紙と御無沙汰をお許し下さい。

あなたが、この地を離れてから早いもので三十年近くが過ぎてしまったのですね。

ペンを執りましたのは、息子洋平が、昨年十二月に急性心筋梗塞で亡くなったことを伝えたかったからです。ラグーマンで体格も良く丈夫な子でしたので思いがけないことでした。

お墓は、菩提寺の東慶寺です。毎月五日の命日には十時に墓参しております。一度お会い出来たら幸いです。

一周忌を終えて

多川 いと

便箋一枚に簡潔に書かれた文章は、行間に溢れる思いを堪えているようだった。

多川いとは、結婚当初の四年余りを過ごした鎌倉の家の近くに住んでいた。新婚夫婦の家は、貸家用に建てられた

平屋の小さな作りだったが、多川家は二百坪余りの敷地に建つ洋館風の家だった。ゴミ置場が一緒だったことから立話をするようになり時にはお茶に誘われることもあった。所謂美しい人ではなかったが、その優しく母性的な人柄は親元を離れて嫁いだばかりの若妻の良き相談相手だった。

そこで過ごした四年間を忘れていたわけではないが、初めての子を流産した土地でもあったので努めて記憶を遠ざけていたのだった。ただこちらの消息はいとの茶道の弟子である友人から聞いていたようだった。

洋平とのかかわりと言えば、親の留守中にゴミを捨てに来た洋平がM商事に就職が内定したことを報告したのでお祝いに夕食でもしましょうと夕陽の見える海岸通りのレストランまでドライブしたことがあった。夫は出張中で、洋平の家族は、いとの実家の函館に帰省中のことだった。

窓際の席からは夕日が美しかった。

「函館に行けなくて残念ね、卒論は順調？」

「なんとか目処がつかました」

「M商事に内定だなんて優秀なのね」

「いいえ、商社ならどこでも良かったんです。海外で仕事をする機会の多いところなら」

「夢があって良いわね、三つしか年齢が変わらないのに」

「詩織さんだって夢はあるでしょう」

「夢とそれを叶えようとするパワーがあったら見合結婚は

しないわ」

ふたりだけでゆっくり話し合ってみると趣味などで共通することが多かった。お互いに洋画ファンでそれまで観た映画では「ドクトルジバゴ」が一番好きだということろまで一致した。

「雪の別れのシーン素晴しかったですね」

「ええテーマ曲も良かったわ。でもそれより生き別れて大分たってからヒロインのラーラを見かけたジバゴが乗っていたバスを止めて必死で追い心臓発作で倒れるシーンがあったでしょう。忘れられないわ、一途に愛を貫くタイプの男性って現実には存在しないから惹かれるのね」

「そうかな、いるかも知れないですよ」

洋平が亡くなったと知らされて当時の会話が、鮮やかに甦ってきた。

二月五日の十時、東慶寺の空気は透んで水仙が美しく咲いていた。白くなった髪を品良くまとめた多川夫人は、静かな笑顔で深く頭を下げた。

「あなたが初めて我が家に引越しの挨拶に見えた時、きっと洋平はこの人を好きになるだろうと思いました。そしてその通りに……。ですからその気持を知っていた親としてはせめてあなたに一度墓参りをしていただきたいとご迷惑を承知でお便りさせていただきました」

それは全く思い当たらないことではなかった。洋平の熱い

視線を感じたこともある。しかし応えられない好意には気付かぬふりをするのが相手への優しさだと考えていた。

墓参りを終え境内にある喫茶店で向かい合うと夫人は、洋平の死について淡々と語り始めた。

「商社のロンドン支社長として赴任して一カ月程たった頃のことです。昔の友人を見かけたからと部下を待たせて追って行った直後に倒れたそうです。きっと疲れてもいたのでしょう。五十歳でしたが、寿命だったと思うことにしました。あの子も精一杯生きましたから」

「おととしの十二月五日ですね」

そうつぶやいてから言葉を失った。一年前の十二月、友人達との旅の途中のロンドンで集合時間に遅れるからと急いでタクシーに乗り短い距離を走った。そして降りた時、遠くで救急車のサイレンが鳴っていたのを覚えていた。確かあれは十二月五日のことだった。

ロンドンの石畳に倒れ込む洋平の姿が目に見えた。三十年前の若さのまま……。熱いものが体の中に満ちてきた。今まで恋とも革命とも遠いところで生きてきた。自分の作った殻の中で……。洋平の靴音がかすかに聞こえた。

喫茶店を出ると傍らに見事な純白の懸崖の菊が置かれてあった。白さが目に沁みて思わず背を向けた。うしろで菊を賞でる夫人の声があった。